

ダブル受賞

おめでとう

愛媛医学会奨励賞

循環器内科 関谷 健佑 医師

近年の気候変動、高齢化社会の到来およびCOVID-19による社会生活様式の変化等により血栓性疾患への関心が高まっています。COVID-19流行初期の夏季短期間に左室内心尖部血栓を合併した3症例を経験し、愛媛医学会誌に発表しました。

症例①は陳旧性心筋梗塞でフォロー中にネフローゼ症候群を併発し、腎生検前のヘパリン化目的で入院した際に15mm弱の可動性の乏しい血栓を指摘された。ネフローゼ症候群では易血栓化が報告されている。抗凝固療法を開始し1ヵ月後に一旦縮小傾向だったがその後血栓の再増大と可動性を認め、手術適応と判断した。症例②は心筋炎に伴う壁運動低下があり、心尖部に15mm大の可動性の乏しい血栓を認めた。心筋炎では血栓の合併が比較的高頻度で、炎症性サイトカインの活性化の関与が報告されている。抗凝固療法を開始3日後に血栓の可動性を認め、手術適応と判断した。症例③は陳旧性心筋梗塞の既往があり、肺がん術前検査で入院した際に血栓を指摘された。この症例では通常心臓の観察で用いるセク

ター型プローブでは血栓を描出できず、(末梢血管や表在臓器の観察に用いる)周波数の高いリニア型プローブで明瞭な血栓を指摘できた。

左室内血栓症に対する抗凝固療法に関しては、近年の論文で①全身性塞栓症に対するワーファリン>DOAC(直接作用型経口抗凝固薬)の有意性や、②左室内血栓の完全溶解による生命予後改善効果等の報告が相次いでおり、非常に注目されている領域です。また本論文ではこれまで通常のセクター型プローブを用いた心臓超音波検査では見落とされていた心尖部血栓の描出が可能であることも併せて報告しており、実臨床面からも非常に有用な症例報告であると考えています。

本論文で報告した3症例について、経胸壁心臓超音波検査を用いて慎重に心尖部血栓の経過観察を実施して頂いた生理検査室 大野静夏先生、論文作成の指導をして頂いた統括診療部長 船田淳一先生に深謝致します。



四国心リハ学会最優秀演題賞

矢野 歩 理学療法士

この度、2023年3月26日に開催された第6回四国心臓リハビリテーション学会にて「生体電気インピーダンス法によるphase Angleと心臓リハビリテーション実施患者の運動耐容能との関連」といったテーマで最優秀演題賞を受賞させて頂きました。

医療用の体組成計を用いて算出されるphase Angleという指標が心臓リハビリテーションを行う患者様の運動耐容能(どれくらいまでの運動に耐えられるかの限界の能力や体内に酸素を取り込む力の指標)と関連するといった発表内容です。

加齢に伴い「筋肉の量」は低下することが知られていますが、近年「筋肉の質」も低下し特に高齢者の方や疾患を患っている方の筋力や身体機能等、各種の有害健康転帰と関連することが報告されていま

す。質の悪い筋肉とは筋繊維自体の割合が減少し、その間隙に脂肪等が浸潤した筋肉のことでイメージとしてはスーパーで見かける霜降り肉のような筋肉のことを指します。

これらを測定できる評価方法として今回報告したphase Angleという指標が注目されています。こちらの指標が心疾患を患っておられる患者様の生命予後の重要指標とされる運動耐容能を簡易的に推定出来る評価方法の一つになり得る可能性があり、今後も継続して研究していく予定です。リハビリテーション室の体組成計で測定が可能であり、ご興味のある方はリハビリテーションスタッフにお声掛けください。

